

日進月歩するデジタル製品を、「使い勝手」ではなく、「実装された新技術」と「製品の革新性」をテーマにレビューしていくコーナー。インプレスのシンクタンク、インターネット生活研究所の研究員が実際にテストしてレポートする。

インプレス インターネット生活研究所
黒田 純一

Vodafone 702NK

(ボーダフォン)

Symbian OSというケータイ向け汎用OSの普及が、オープン化への幕開けとなる

Symbian OS ネイティブなアプリによって、機種種の壁を越える

昨年の秋、あるケータイが発売されて注目を浴びた。それがSymbian OSを搭載するボーダフォンの「Vodafone 702NK (Nokia 6630)」だ。

Symbian OSとは、英Symbian社が開発したケータイ向けのOSで、APIが公開されていたり、マルチタスクに対応していたりするなど、これまでのケータイ向けOSと比べてかなり高機能だ。

Symbian OSが興味深いのは、その高機能さだけではない。APIが公開されているだけでなく、ソフトウェアの開発キットがフリーで公開されているため、専用アプリケーションの開発が簡単だという点もある。

加えて、Symbian社には、NokiaやMotorola、松下電器など世界中のケータイ端末メーカーが出資しており、Symbian OSを搭載する端末も増え続けている。

つまり汎用的なケータイOSとして、メーカーやオペレーターの垣根を越えて多くのケータイに搭載されていて、それ

らのケータイ上で共通のアプリケーションが動くのだ。これは非常に画期的なことなのだ。

日本においては、ケータイの仕様はオペレーターが主導で決める部分が多く、とくにアプリケーションに関してその傾向が強い。このため同じメーカー製の端末であっても、オペレーターが異なるとアプリケーションが共通して使えるということは、まずなかったのだ。

ケータイ向けのソフトやサービスを提供するサードパーティーは、それぞれのオペレーターや機種ごとにソフトを開発したり、動作確認をとったりなど、苦勞が絶えないという。

日本で初めての“オープンプラットフォーム”なケータイ端末

Vodafone 702NKは、すでに海外でNokia 6630として発売されており、その仕様は基本的に世界共通だ。つまり日本国内だけを意識した製品ではない。

逆に言えば、このことはこれまでの国内メーカー製端末とはその設計思想や、具体的な操作手順などが大きく異なる

ことを意味している。

従って日本のケータイを使い慣れた一般のユーザーからは「メニューの階層構造がわかりづらい」「液晶画面が小さい」「電源の入れ方がわからない」「ボタンの配置が普通と違う」などといった、どちらかといえばネガティブな印象を抱かれてしまう。

これはそのまま、日本のケータイ市場と世界のそれとでは、大きな開きがあることを示している。単純にPDC方式とGSM方式という、通信方式の違いのみならず、内部に使用されているOSやソフトウェア、そして操作方法といったところまで大きく異なっているのが現状だ。

だが、SIMカードを導入している3Gケータイの普及や、2006年に始まる番号ポータビリティなどによって、日本でもオペレーターと端末とサービスが、それぞれ分離される流れにある。これは日本と世界のケータイ市場の接近を意味している。

それを前提に、あらためて702NKを見てほしい。世界共通のSymbian OSを搭載していて、世界中で開発されている各種のソフトを利用できる、未来の3Gのケータイ端末の先駆けとは言えないだろうか。

Symbian OSの登場は、APIの公開によるオープンなソフトウェアの登場のみならず、これまでオペレーターごとに閉じていたケータイ自体のオープン化にもつながっているのだ。

今後進むケータイ業界のオープン化の流れの中で、Vodafone 702NKは日本のケータイ市場の歴史にその名を残すに違いない。

[Reviewer's View]

ケータイ端末はPHSとの競合で小型化が進んだが、ここ数年は逆にカメラなどの機能が追加されて、端末自身も大きくなり、機能も多様化している。

今後ケータイに高機能なOSを搭載するのが流れになったとき、あくまでも携帯電話オペレーターの主導でAPIが提供されるのか、それともAPIがオープン化され、さらに多様なアプリケーションが普及することになるのか。今後の流れに注目したい。

ボーダフォンの「Vodafone 702NK(Nokia 6630)」は、2004年10月に発売されて以来、ヘビーユーザーの間で静かなブームとなっている。携帯電話としては、日本国内では3GであるW-CDMAによって、さらに海外ではトライバンドのGSM(800 / 1,800 / 1,900MHz帯)によって、世界中で通話やデータ通信が可能だ。またBluetoothによるハンズフリー通話機能や、POPやIMAP4に対応したメールクライアント、PCのOutlookとのSyncや、PC向けのウェブサイトも見られるいわゆるフルブラウザが標準搭載されている。



[写真左]Vodafone 702NKの正面。分類上はストレートタイプということになるが、ずんぐりとした外観や、画面がキー部分よりも大きい形状といい、携帯電話というよりもPDAに近い雰囲気だ。電源ボタンは右サイドにある。

[写真右]Vodafone 702NKの背面。日本メーカー製の端末に比べると、驚くほど存在感のあるカメラユニットが特徴的。背面だけを見るとケータイではなくデジタルカメラのようだ。下端にある銀色のボタンを押しながらスライドさせると、カバーが簡単にはずせる。

[写真左]キー部分を拡大。国内メーカー製のケータイを使い慣れた人は、独特の操作体系にとまどうかもしれない。

[写真右]メニュー画面はアイコン表示で機能的な構成になっている。だが、やはり国内メーカー製端末とは大きく異なるので、慣れるまではマニュアルが必須だ。

DIGA DMR-E500H

(松下電器産業)

DLNA 対応で家庭のメディアサーバーの地位を 狙う HDD レコーダー

密かに繰り広げられる AV ラック の場所取り戦争

松下電器が2004年に発売したDIGA DMR-E500Hは、同社のHDDレコーダーの最上位機種だ。注目なのは、DIGAシリーズでは初めて、DLNA準拠のホームネットワーク機能を搭載したことだ。

DLNAとは、デジタル家電同士をネットワークで接続し、家庭内で映像や音楽などのデジタルコンテンツを共有して、さまざまな楽しみ方を可能にするガイドラインだ。デジタル家電での利用を主眼に置いた規格だが、現状ではネットワーク機能やマルチメディア機能を搭載したパソコンでの利用が進んでいる。しかし、デジタル家電のメーカーもDLNAへの対応は積極的に進めており、2005年には多くの対応機種が登場する予定だ。

このDMR-E500Hも、DLNA準拠のホームネットワーク機能によって、蓄積したコンテンツを配信するメディアサーバーになり、パソコン上からDMR-E500H内の映像を見たり、DMR-E500H同士で連携したりできる。

ネットワーク機能の充実が勝敗 の鍵を握る？

2004年はオリンピックなどのテレビ番組がデジタル家電の売り上げを大きく押し上げた。その反面、TV録画機能を備えたマルチメディアタイプのパソコンの売り上げが伸び悩んだという。

だが、PC側も負けてばかりではない。マイクロソフトは「Windows XP Media

Center Edition」の熱心な売り込みを続け、Mac miniのように小さくてリビングに置きやすいPCも登場した。

そして何よりもiTunes Music Storeのようなオンラインでのコンテンツ配信ビジネスの普及が大きい。インターネットベースのコンテンツ配信は、PCからの方が利用しやすい。また、iPodのようなHDD / シリコンオーディオプレーヤーも普及が進み、出荷台数でMDを抜き去るという勢いだ。

音楽を中心としたコンテンツ配信ビジネスを背景に、パソコン陣営が踏ん張る一方で、価格と簡単さで勝るデジタル家電はDLNAへの対応をはじめとして高機能化でパソコンに対抗する。

家庭内でのエンターテインメントを巡るPCとデジタル家電の争いは、もうしばらくは続くようだ。

[Reviewer's View]

ADSLや光ファイバーによって家庭にブロードバンド環境が整いつつある。その中で接続されているのはほとんどの場合PCである。そのネットワークをどのようにして家電製品に接続するか？ 無線LAN、アンテナの同軸ケーブル、商用電源などの方式が提案されている。いかにしてHDDレコーダーの価値が家庭で発揮されるかはラストワンマイルではなく、ラスト10フィートにかかっている。

400 GBのHDDとDVDドライブを搭載したDMR-E500H。DVDへのダビングも実時間ではなく最大64倍速が可能だ。録画予約は携帯電話やPCによって、リモートから行うこともできる。さらに、録画時のビットレートも、映像の動きやその複雑さに追従して自動的に最適化するNewディーガエンジンを搭載している。そしてDLNA規格によってメディアサーバーとしても機能する。



MTV-S10

(東芝)

日本全国を一気にカバーし、移動しながら楽しめるデジタル放送インフラの可能性

全国で移動しながら放送を受信

2004年10月、日本全国をカバーする新しい放送局「モバHO！」がスタートした。運営するのは、東芝や韓国のSKテレコムなど90社あまりが出資する「モバイル放送株式会社」だ。まだ始まったばかりで知名度は低いですが、すでに映像と音声合わせて40チャンネルほどの放送を行っている。

このモバHO！は日本中で、しかも移動しながら受信できるというのが売りだ。全国をカバーするといえば、BSやCS放送を思い浮かべるが、実はこのモバHO！も衛星放送なのだ。

しかし、衛星放送は受信にパラボラアンテナが必要で、常にアンテナを一定の方向に固定しなければならないが、モバHO！の端末には、それらしきものが見えない。

また、これまで移動しながら楽しめる放送といえば、地上波のテレビかラジオだったが、どちらにしても地域ごとに放送局が異なり、周波数やチャンネルを変える必要があった。

ギャップフィルターの威力

では、モバHO！は、これらの難題をどうやって解決したのか？ モバHO！ではSバンドと呼ばれる周波数(2.6GHz帯)を使用しているが、これは衛星放送で一般的なものだ。ただし、都心のビル陰などで直接受信できない地域や、室内での受信のために、補助的な設備「ギャップフィルター」がビルの屋上などに設置されている。見た目も機能も携帯電話の基地局によく似たギャップフィルターによって、電波が隙間なく届けられているのだ。

「MTV-S10」を実際にいろんな場所でテストしてみたが、都内の電車の中やタクシーの車内、地上テレビ放送の受信が困難な団地の部屋でも問題はなかった。長距離移動のテストとして東海道新幹線に持ち込んでみたが、車内からも南側の窓際ならばほぼ受信できた。

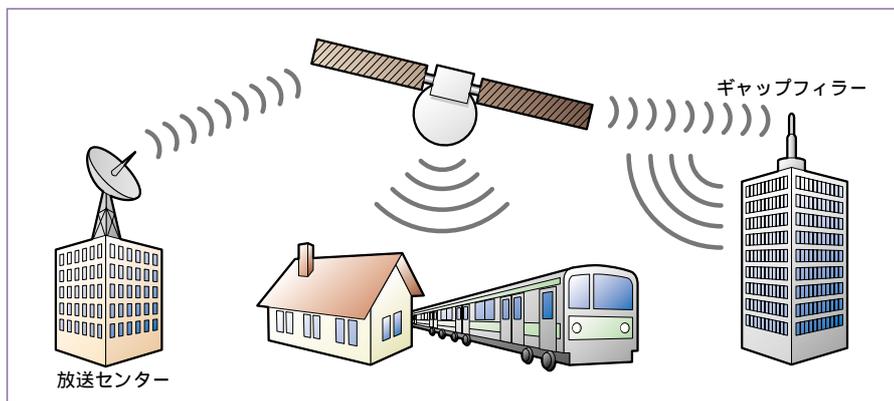
今回試したMTV-S10はモバHO！専用機だが、今後はカーナビやケータイでも対応機種が発売される予定だ。インフラはすでに整った。あとは端末をどう普及させるかが課題だ。



「モバHO！」に対応した、ポータブル受信機「MTV-S10」。映像はMPEG4、音声はAACによって放送されている。番組をSDメモリーカードに録画しておき、後から再生も可能。付属のAVケーブルによってテレビやステレオに出力して番組を楽しむこともできる。また電波状況が悪い場所では、付属の外部アンテナを利用できる。

[Reviewer's View]

このMTV-S10は「モバHO！」を体験するモバイル端末としては、小さくまとまっている。しかし付属の充電池では、1時間余りしか利用できないのが難点だ。「モバHO！」に関心を持った方でノートPCを持っていれば、PCカードチューナーという選択肢もある。モバイル向けのロングバッテリータイプのノートPCと組み合わせれば長時間の視聴も可能だし、実売価格も1万円弱と戦略的な価格に設定されている。



衛星からの電波はモバHO！端末に直接届くほか、ギャップフィルターによって再送信されている。

©Mobile Broadcasting Corporation.

ギャップフィルターは、Ku帯で衛星から送信された放送電波をパラボラアンテナで受信し、S帯の垂直アンテナから再送信している。



[インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ] ご利用上の注意

このPDFファイルは、株式会社インプレスR&D(株式会社インプレスから分割)が1994年～2006年まで発行した月刊誌『インターネットマガジン』の誌面をPDF化し、「インターネットマガジン バックナンバーアーカイブ」として以下のウェブサイト「All-in-One INTERNET magazine 2.0」で公開しているものです。

<http://i.impressRD.jp/bn>

このファイルをご利用いただくにあたり、下記の注意事項を必ずお読みください。

- 記載されている内容(技術解説、URL、団体・企業名、商品名、価格、プレゼント募集、アンケートなど)は発行当時のものです。
- 収録されている内容は著作権法上の保護を受けています。著作権はそれぞれの記事の著作者(執筆者、写真の撮影者、イラストの作成者、編集部など)が保持しています。
- 著作者から許諾が得られなかった著作物は収録されていない場合があります。
- このファイルやその内容を改変したり、商用を目的として再利用することはできません。あくまで個人や企業の非商用利用での閲覧、複製、送信に限られます。
- 収録されている内容を何らかの媒体に引用としてご利用する際は、出典として媒体名および月号、該当ページ番号、発行元(株式会社インプレス R&D)、コピーライトなどの情報をご明記ください。
- オリジナルの雑誌の発行時点では、株式会社インプレス R&D(当時は株式会社インプレス)と著作権者は内容が正確なものであるように最大限に努めましたが、すべての情報が完全に正確であることは保証できません。このファイルの内容に起因する直接のおよび間接的な損害に対して、一切の責任を負いません。お客様個人の責任においてご利用ください。

このファイルに関するお問い合わせ先

株式会社インプレスR&D

All-in-One INTERNET magazine 編集部

im-info@impress.co.jp